

不登校児童生徒に対するグループアプローチに関する実践研究

- 個々の変容を目指した担当者相互の連携と子どもたちへのかかわり -

グループアプローチ研究会議

グループアプローチ研修員 川上 一幸（川崎市立中原中学校）

研修員 小松美佐子（川崎市立中野島中学校） 橋谷 由紀（川崎市立坂戸小学校）

有馬奈穂美（川崎市立岡上小学校）

主題設定の理由

文部科学省の統計によると平成13年度の全国の不登校児童生徒数は、小学校で26,503人、中学校で112,193人にのぼり、引き続き増加傾向にある。川崎市総合教育センター教育相談センターでは、不登校児童生徒に対して、個人相談を行っているが、それに加え、昭和61年度よりグループアプローチを実施している。その有効性はすでに先行研究において数多く検証されている。

本研究会議では、今までの実践の成果を受け継ぎ、個人と個人あるいは個人と小集団とのかかわりの中で、何がどう有効に作用して個人の変容につながるかを明らかにすることを試みたいと考えた。

また、実践研究を進める中で、ゆうゆう広場（川崎市適応指導教室）や相談指導学級に通い始めた子どもたちをどう理解したらいいのか模索すること、さらに、担当者自身の変容および担当者相互の連携によって子どもたちの可能性を引き出す試みも研究の対象としていきたいと考え、主題を「不登校児童生徒に対するグループアプローチに関する実践研究」とし、サブテーマを「個々の変容を目指した担当者相互の連携と子どもたちへのかかわり」とした。

研究の内容

1. 活動の内容とその状況

(1) 参加対象

基本的には、個人相談を受けていてグループ活動に参加する意志があると判断される小・中学生。今年度は、3名の女子中学生で、中学2年生が1名で、中学3年生が2名。

- ・ A（中学3年生）小学校3年生から不登校。初回相談は平成8年11月。グループアプローチには平成10年2月から参加。今年度4月から相談指導学級に通い始めた。
- ・ B（中学3年生）小学校3年生から不登校。初回相談は平成9年2月。グループアプローチには平成10年10月から参加。昨年度途中からゆうゆう広場、今年度5月から相談指導学級に通い始めた。
- ・ C（中学2年生）小学校4年生から不登校。初回相談は平成11年2月。グループアプローチには平成11年10月から参加。昨年度途中からゆうゆう広場に通っている。

(2) 担当者

グループアプローチ研修員（1名）・研修員（3名）。グループアプローチ研修員は毎週参加。研修員は3名がローテーションを組む形でそれぞれが月2回担当するので、毎回の担当は平均2～3名。

(3) 活動時間と場所

活動時間は毎週金曜日の午後2時から午後4時の2時間。場所は塚越相談室3階のふれあいホール。ただし、軽スポーツ等の活動では塚越相談室のプレイルームや前庭を使用することもある。

(4) 活動内容

不定期ではあるが、子どもたちと担当者が相談しながら予定表に内容を記入していく。子どもたちの希望によるものが多いが、活動内容に偏りがでたり、特定の子どもの得意な内容が続く状況になる

と、担当者が新しい内容を紹介し、子どもたちの同意の上で活動することもある。

たこ焼き、クレープ、クッキー、ホットケーキ、流しそうめん、餃子、お好み焼き等の調理。編み物、ビーズ細工、弁当包み作り、まめまめクリップ作り等の手芸。卓球、ビリヤード、バドミントン等の軽スポーツ。トランプ、チェス、人生ゲーム、ビンゴ等のゲーム。絵画、落款、コラージュ、ポスター、自己紹介カード、他己紹介カード、紙粘土細工、絵本、書き初め等の創作活動。

以上が具体的な内容であるが、これらの活動のすべてが、子どもたちと担当者、そして、子どもたち相互のかかわりが深まりやすい環境を模索しながら設定したものである。

子どもたちの心の中を垣間見るには、自己紹介の掲示物、絵画、コラージュ等の創作活動が適している。しかし、続けてそれらに取り組むことを子どもたちは望んでいない。軽スポーツは勝ち負けがからみ、得手不得手の差が大きい。これら活動意欲に直接影響するものについては特に配慮した。

(5) 活動のふりかえり

子どもたちの活動の様子を客観的に、克明に記録する方法としては、ビデオ、写真、録音等が適当であると考えられる。しかし、こういった機材を使つての記録よりも相互のかかわりの中で見られる表情や言動の方がここでは大切であるということと人権への配慮から、上記の方法は採らなかった。

毎回のふりかえりの中で、今年度、特に重要視したのは担当者個々が自分自身について感じたことや担当者相互のかかわりの中から生じた思いのまとめである。

毎回のふりかえりの他に、定期的に研究会議を開き、子どもたちの変容を整理し、次回以降に向けての方策を練る。また、機会があるごとに子どもたちの情報を得たり、担当者から臨床的な意見を得たりして、以後の実践研究の参考にする。

2. 参加者の特徴と変容

子どもたちは他のメンバーや担当者とのかかわりの中でさまざまな言動を見せる。担当者は、子どもたちは変容していくものだという視点で子どもたちを観察する。また、直接子どもたちとかかわることや他の人とのかかわりの様子から、子どもたちの特徴や変容を見取る。そして、ふりかえりの中で子どもたちの特徴や変容を言葉にする。ここで各担当者の見取りの相違が明らかにされる。そこで意見交換を重ねることによって、個々の見取りを言葉にしたものに厚みをもたせ、客観性をもたせたいと考える。ここではふりかえりの中での担当者の言葉を中心に、一番かかわり方を考えさせられたAさんの特徴と変容をとらえる。4人の担当者を便宜上a, b, c, dとする。なお、bは昨年度から継続している担当者である。

(1) Aさんの特徴と変容

4 / 2 6 自己紹介	a いつの間にかメモ係をやっていた。 お腹をぶってきた。 c かかわりたいけれど、反対の表現をしてしまう感じ。目が合わない。 d 一番視線を感じた。視線を合わそうとすると目をそらす。人間的な興味が沸いた。
5 / 1 0 たこ焼き	a 父親の話をした。 お腹をぶってきた。 b 器用に調理をしていた。オルガンを弾いていたが、昨年度は皆無だった。 c 前回より目が合うようになった。
5 / 2 4 クリップ	a 相談指導学級の話をも自分からしていた。まめまめクリップのブタをくれた。 b 集中力、忍耐力がついた。
6 / 2 1 ホットケーキ	a 「こんにちは」と声に出してあいさつした。来る時に乗ったバスの話を自分から話した。ここに来てほっとしている感じ。今までで一番いい感じ。 お腹に触った。

	d 緊張感がとれて、おだやかな顔つきに変わった。目を見て、うれしそうに話す。
7 / 5 落款作り	a 落款作りのときには、家族全員の名前を調べていた。 b 兄の話をしていて、aの服でぬれた手をふくといういたずらをしていて。 c いつものようにaに興味を示していた。ブツブツ言いながらも、よく作業をした。
7 / 12 人生ゲーム	a 一番先に来て、ゲームの用意をした。不平不満もほとんどない。 b ゲームの銀行係でお金を投げることもあったが、去年とは全く違う。 c 明るくなった。「学校の先生は嫌い」と言っていた。 d 笑う。しゃべる。しゃべりたい。お腹を触ってきた。
7 / 26 卓球	a お腹をつねる、触る。 母親の愛情についての話には耳を傾けていた。 d 自分が中心ではなかったのに、機嫌が悪かった。
8 / 23 そうめん	a かかわってもらいたい。 お腹をたたく。 疲れていたら、「暗い」と言った。 b cがくれたお土産をとてよるこんでいた。 c 「お腹が痛い」と言ってあまり食べなかった。風邪気味なのに来た。 d 終了時刻30分過ぎても帰らなかった。カエルのぬいぐるみを出した。
9 / 6 クレープ	a 気付くとそばにいた。自信が出てきたのか、オルガンを弾いていた。サマーキャンプのしおりの自分が書いたページを見てもらいたくて、持ってきていた。遅刻しそうになったため、母親の車で送ってもらって来た。 b 調理の準備は「いやだ」と言いながら、よくやっていた。Cさんの話はつまらなそう。Bさんが来て、ほっとしていた。相談指導学級に行っているが、ここにも「来て」と言ってもらいたがっている。 c 相談指導学級のことが気になっている。明るくなった。兄の批判をする。
9 / 20 コラージュ	a 家族旅行の話積極的にしていた。母親の車で来た。 お腹を触ってきた。 b 旅行で買ってもらった真珠のストラップについてうれしそうに話す。 c 旅行の話、ストラップの話ともにとていい顔。大人の批判が印象的だった。
10 / 11 他己紹介	a dが描いた自分が気にいらなかった。自分はどう描かれるかが心配で居ても立ってもいられず、「つまんない」を連発。帰り際にBさんに「一緒にいってもいい」と聞く。仲がいいようで、かなりの遠慮がある。緊張が解けた終了直前はよくしゃべるし、 お腹も触りにきた。 b dが描いた自分の似顔絵が気にいらぬ。描かれることに緊張感がある。
10 / 18 粘土細工	d 機嫌が悪い。「Aさんは絵が好きだから、たこ焼きの次に絵本はどう？」と投げかけるとうれしそうな顔をする。
10 / 25 たこ焼き	c 「これは私の出番」という感じ。よく食べていた。大人の批判をしていた。 d 機嫌がいい。自分のペース。
11 / 1 絵本作り	d 絵本作りに没頭。言いたいことが言えるようになった。aに擦り寄っていった。人に対してパンチをしなくなった。開始当初とは明らかに違う。
11 / 29 お好み焼き	b キャベツを全部切った。オルガンを弾いていた。 c 一番普通にしゃべれる。触りにくる。カバンや手帳を見たがる。
12 / 20 人生ゲーム	c 担当者3人にメンバー1人はかわいそう。「つまんない」を連発。 d 「つまんない」を連発。メンバーの存在が大きくなってきているのを感じた。
1 / 10	d aに対して「デブ」「ブタ」などと口では言っているが楽しそう。素直な表現が

ビンゴ	できないのが残念。
1 / 17	b 大人の批判をしていた。
ピース細工	d 進路について具体的な悩みがでてきた。それについて話せるようになった。
1 / 24	a 自分で自分の書き初めを展示していた。Bさんと具体的に進路の話をしていた。
書き初め	気に入らないことがあったが、態度に大きな変化がなかった。大きな成長。
	d 何枚も書き初めを書いていた。口に出す不満が照れ隠しのように聞こえた。

(2) Aさんとaとのかわり

9 / 27	Aさん「ゴミ捨てて」a「自分で捨てろよ」とは言ってはみたが、結局はaが捨てた。 <u>次に出たゴミはAさんが自分で捨ててに行った。</u>
10 / 18	Aさん「ゴミ捨てて」a「自分で捨ててこい」Aさんはプイと席を離れた。その後は機嫌が悪く、他の担当者に当たり散らしていた。 <u>30分ほど経つとaのニックネームを呼んで、紙粘土でいろいろなものをつくってくれと言ってきた。それには応えた。</u>
10 / 25	<u>先週のことをとても気になっていた。</u> Aさんも気にしていた。Aさんはよく話しかけてくれた。開始2～3分で大丈夫だと思った。
11 / 1	Aさんがいつものように隣に椅子を移動させて座った。 <u>自分でゴミを捨ててに行った。</u> 「汚れちゃった」と言うので、「洗えば」と言うと、 <u>自分で洗いにいった。</u> その後、絵を描いてくれ、清書してくれ、漢字を教えてくれと甘えてきた。腕の辺りを触ってきた。
11 / 29	誕生日を覚えていて、プレゼントをくれた。 <u>aの隣に座っていたbが席を離れるとそこに座りにきた。</u> お腹を触ったり、たたいたりしたが、肩もみも丁寧にした。
12 / 6	Aさんがaのお腹をやや強くたたいた。aは不機嫌な恐そうな顔で「それはよくないことだ」と言った。 <u>Aさんは不機嫌になることはなかった。</u>
12 / 20	他のメンバーが来なかったので、「つまんない」を連発していたが、自分の気持ちをストレートに表せていたと感じた。 <u>人にあたることはなかった。</u> 成長を感じた。
11 / 10	「デブ」「ブタ」と言ってきたので、「正月早々、景品も全部用意してきて、こんなこと言われたんじゃかなわない」と笑顔で言えた。 <u>Aさんも照れ笑いをしていた。</u>

この4ヶ月近くにわたる一連のAさんとのかわりの中で、言えない関係から言える関係にと担当者自身が変わったことと周囲に連携できる人がいてくれることの大切さを実感することができた。

3. 担当者の変容と連携

毎回のふりかえりでは、子どもたち個々について、まず話し合った。その後、担当者自身そして担当者間のことについて話し合った。このように担当者の変容を重視しながら連携を深められたことが、子どもたちの変容を促進させることにつながったと考える。

(1) bのふりかえりから

1学期・子どもたちから皮肉めいた言葉が減ってきた。昨年度は触れられたくない部分に触れられると拒絶していた。昨年度の担当者が見たら、びっくりするだろうし、喜んでくれるだろう。

- ・多くの担当者で見ると安心。担当者の人数が多いと子どもたちの発言を拾えることが多くなる。今までの人生ゲームで一番楽しかった。

2学期・aはコラージュを2枚描いた。それがいつもは取りかかりの遅いBさんの原動力となった。

cは「飽きちゃったね」と言っていた。子どもたちはどちらも選択することができた。

- ・担当者の接し方がいいので、Bさんからきつい言葉が返ってこない。今まで気を遣っていたが、身構えていた自分を変えたい。
- ・子どもたちは自分には触りにこない。カバンの中も見ようとしない。自分の中に触られたら困るという気持ちがあって、それを子どもたちに悟られている。
- ・ここの子どもたちをかわいいと思う気持ちが今年は出てきた。

3学期・自分自身が非常にリラックスできるようになった。今まではアンテナをはりすぎていた。リラックスしすぎて、ふりかえりで思い出すことが難しくなった。子どもたちはとにかくトゲトゲしていない。いい意味での気遣いができるようになった。

(2) aから見たb

3学期・今日bは子どもたちが持ってきたチョコレートを断らずに食べていた。ついこの間まで、bは必要以上に子どもたちに気を遣っていた。子どもたちが変容したおかげで、担当者も変容できたのだと思う。

(3) 担当者の連携(dのふりかえりから)

- 2学期・互いに言い合える関係ができたので、とてもやりやすい。気持ちが楽で、安心感がもてる。
- ・担当者同士の仲がいいことを子どもたちが感じ取っている。子どもたちは大人同士の人間関係に敏感。各々に担当者は決めていないが、阿吽の呼吸でうまくいっている。このふりかえりは重要。職場でも毎日できればいい。
 - ・ここの担当者はうまく連携できている。担当者の仲がいいと学習効果は上がる。この子は私の子というのがなくていい。
 - ・担当者同士が会話しているときに、子ども同士が会話するようになった。とても自然。

研究のまとめ

1. 成果

(1) 相談指導学級、ゆうゆう広場に通っている参加者の変容とグループの必要性

4月から相談指導学級に通い始めたAさんの口癖は「つまんない」と「来たくない」。それでも遅れそうになると母親の車で来室。遅刻することもほとんどない。グループへの参加を促す担当者の言葉に対して、いい表情を見せる。2学期以降は相談指導学級や進路決定に向けての話を聞いてもらいたいという積極的な姿勢が見られるようになった。

ゆうゆう広場を経験した後、5月に相談指導学級に入級したBさんは今年度初めは試験的に通級していたが、相談指導学級の仲間たちと遠足に参加できたことで踏ん切りがついたようだ。ゆうゆう広場の話も、相談指導学級の話もよく聞かせてくれた。3学期は進路決定に向けての学校見学等があった。終了時刻間際になって、遠いところから通ってきていた。

ゆうゆう広場から時間になると降りてくるCさんは、生活面でも問題を抱えている。ゆうゆう広場を欠席しても、こちらには参加することがあった。ゆうゆう広場にも仲間がいるが、彼らとは一緒に帰らず、こちらにやってくる。

3人の子どもたちは数年間のグループアプローチによって、相談指導学級、ゆうゆう広場に通えるようになり、担当者とも言い合える関係ができつつあり、ある程度のソーシャルスキルが身についたという有効性を具体的に示すことができた。しかし、彼女たちはグループでの活動をまだ必要としていることがその言動から伝わってくる。相談指導学級・ゆうゆう広場とグループとの二重構造と言え

る状況を続けてきたのは、彼女たちにとって自分を表現できる場所として、安心できる場所として、グループが必要であるからだと考えられる。

(2) 担当者間の連携

子どもたちは大人同士の人間関係に敏感である。担当者同士の人間関係を作り上げるという点でもふりかえりの時間は重要である。実際に活動する場面では、担当者間の連携を確認している余裕はない。それを確認しておく場がふりかえりの時間であると考えられる。

その重要性を再確認したことを共有できたふりかえりは人間関係を構築する上でも、自分自身を見つめ直す上でも、よりよい連携の仕方を考える上でも有意義であった。

よりよい連携の仕方考えることができたからこそ、Aさんとaとのかかわりの中で、「言える関係」が構築できたと考えられる。

2. 課題

(1) 担当者のローテーション、情報交換、連携

子どもたちはグループ活動を楽しみに毎週やってくる。子どもたちそれぞれに担当者を決めることはしなかったものの、2ヶ月近く子どもたちにかかわれない研修員がいる状況があった。情報交換や連携の難しさと同時に、子どもたちの様子を実際に見られないもどかしさがあった。

(2) 生活面での指導との兼ね合い

学校では教育相談的な受容と生活面での指導との狭間で葛藤が生じる。グループ活動に参加している子どもたちの中にも、生活面で心配な子どもがいる。ある程度のソーシャルスキルが身に付いてきているとはいうものの、社会規範にうまく適応できないから苦しんでいる子どもを目の当たりにして、ここでも葛藤が生じる。指導しなければという思いを捨て去ることも難しいが、それをその子どもにストレートには伝えられないことの方がさらに難しかった。

しかし、子どもたちと私たちの変容によって、ある程度伝えられる関係ができてきた。伝えられる関係がうまくできなかった場合に、どう対処するか考えておく必要がある。

(3) グループからの脱却への働きかけ

前述の通り、現在グループ活動に参加している子どもたちは3人も相談指導学級やゆうゆう広場に通えているものの、依然、グループでの活動も必要としていると判断しながら彼女たちと接してきた。そのため、変容を見出しつつも子どもたちにグループ活動からの「卒業」については、積極的な働きかけをしなかった。

現在の参加者についてはこのような対応でよかったと考えるが、今後、似たような状況が起こった場合、どのような働きかけをすべきであるのかを考えることも今後の課題である。

最後になりましたが、この研修の機会を与えていただいたことに感謝するとともに、貴重なご指導ご助言をいただきました教育相談センターの方々、及び勤務校の校長先生をはじめ諸先生方に心より感謝申し上げます。

【参考文献】

小泉英二他『登校拒否 その心理と治療』学事出版

1988年

【指導助言者】

川崎市総合教育センターゆうゆう広場カウンセラー

松井 恭子

川崎市総合教育センター研修指導主事

山本 浩之